

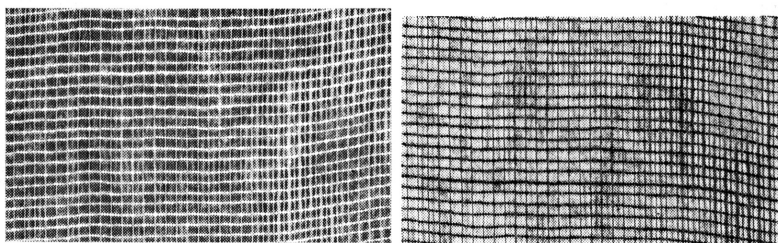
④ ビニロン系	75,737	⑦ ポリ塩化ビニール	11,819
⑤ ポリプロピレン	49,432	⑧ ビニリデン (サラン)	6,040
⑥ ポリエチレン	12,528		

クミアイ・カシミロン

寒冷紗の
出来るまで

＜江州産業(株)＞

長浜工場を視る＞



クミアイ・カシミロン寒冷紗 (#A-102) クミアイ・カシミロン寒冷紗 (#B-202)

こうして製出されたカシミロンの原綿糸は、織布工程の如何によって、それぞれ旭化成工業㈱の、或はその関連会社の工場へ向けて発送される。

今回、チッソ旭肥料㈱が手がけることになった“クミアイ・カシミロン寒冷紗”の原綿糸は、富士工場から江州産業(株)長浜製織工場(滋賀県長浜市国分田町)へ送られて、紡績・製織・加工・染色(加工・染色は同市高田町の染色工場)されて初めて“クミアイ・カシミロン寒冷紗”となり、いったん倉入れされたのち、オーダーに従って全国各地の農家の皆さんのお手許に届くことになる訳だ。

寒冷紗と云っても、ご存知ない方がおられると思うが、概念的には医療用ガーゼを考えて頂くと理解しやすい。或は古い書籍をご覧になると、綴じ込んである背の部分がこわれないように、目の粗らい織布が貼ってある。これが寒冷紗である。

筆者は一応、概念的には寒冷紗というものを掴んでいるが、農業用資材としての寒冷紗の現物は茶園で見かけたという程度で、しみじみと見たことはない。そこで、“寒冷紗ができるまでなら書いたものがある…”という話もあったのだが、この種のものを書くにはやはり、現地を見た方が情がうつるような気がして、気まぐれな雪が止んだ1月下旬の或る日の午後、滋賀県長浜市に江州産業(株)製織工場(染色工場は割愛)を訪れ、取締役・営業部長の大谷治男さんにお目にかかり、いろいろ話を伺った。

“おいでの節は、米原駅に旗を立てて、お迎えに上がりますので…”ということであったが、線路のひび破れとかで、この日もまた新幹線が30分も遅れたというのに、改札口を見ると“チッソ旭

肥料様”と書かれた紙の白旗を持って自動車の運転手さんが出迎えておられたのには恐縮した。

快晴と云っても春はまだ浅く、湖東(琵琶湖)の上空には青空がのぞいていたが、ひる過ぎの風はさすがに冷たい。伊吹山の偉容を右前方に眺めながら、国道8号線を約10分ほど走って、長浜駅を左に見ながら右へ入ったあたりに、江州産業(株)の本社と製織工場があった。

“どうぞ2階へ…”と促がされて階段をのぼって応接室へ入り、ソファに腰をおろそうとして右の欄間を見ると、1枚の感謝状が懸っている。

受賞者はもちろん江州産業(株)であり、授与者は旭ダウ・取締役社長堀深となっている。文意を見ると、旭ダウのビニリデン系繊維サランが市販された昭和28年から、貴社は熱心にその開発に努められた功績を市販15年を記念して表彰するという意味のもので、昭和43年8月吉日とあった。

江州産業(株)と旭化成工業(株)グループとの連携は、このときに始まったことが判る。

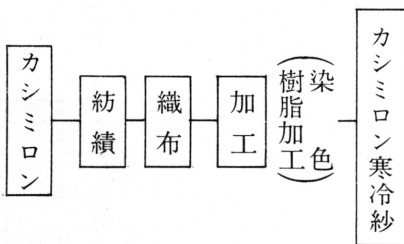
“あの感謝状がお目に止まりましたか?”と大谷さんは微笑しながら、

“当社の創立は大正11年6月ですから、はや半世紀を過ぎた訳ですなあ…。ご承知のように当長浜市は“浜ちりめん”で有名なほか、麻蚊帳(あさがや)の産地としても知られております。従って創立当初の主たる業務はやはり蚊帳の生産でございました。”

“ただ蚊帳と申しまして、戦後、一般の生活環境が大きく変化するにつれまして、麻蚊帳の需要はめっきり減退致しました。当今ではかつての1/10ぐらいでしょうか?従って10数者を数えましました麻蚊帳生産者も殆んど転廃業致しました。”

“なるほど今日では、蚊帳は以前ほどの需要はございませんと申しますもの、全

寒冷紗が出来るまで



然皆無という訳ではございません。28年にたまたま旭ダウさんがサランを市販されました。このものの比重が重いので蚊帳に適しているという話を伺いまして、それからサランの蚊帳の生産に乗出しました訳でございます。それが旭化成グループと私どもとの出会いでございます。”

というから、既に4半世紀近い絆(きずな)が結ばれている訳で、売上の70%から80%までが旭化成グループ関係で占められているという事実が、この両者の関係をよく示していると思う。

“こちらで織っております“クミアイ・カシミロン”は、この織見本をご覧になると判りますように、

品 種	色	巾	荷 姿	遮光率
A-102	白	135cm	100m 2本入り一梱包	24%
A-103	白	180"	"	24%
B-202	黒	135"	"	42%
B-203	黒	180"	"	42%
B-303	黒	180"	"	55%

の5銘柄でございます。Aはすべて白色、Bは黒色。品種ナンバーの頭10, 20, 30はそれぞれ糸の太さ、末尾の2と3は巾を表わしております。織布の長さ、あとでご覧になりますように、600mとし、200mで一梱包と致しております。”という事であった。

“それでは工場をご案内致しましょう。”と促がされて“クミアイ・カシミロン寒冷紗”の製織工場に入る。入ったトタン、耳に入るのは大谷さんの説明ではなくて、50台からあるという織機が奏(かな)でる華麗なるオーケストラのメロディーがガチャガチャ…。そして、とき折、大谷さんの声が天井で囁いているように聞えてくる…という工合だ。

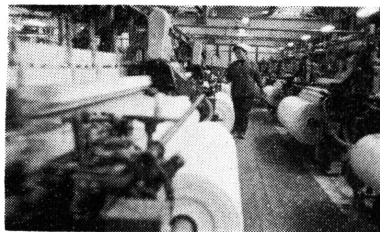
そこで大谷さんが説明されたこのカシミロン寒

冷紗製織工場の概要を示してみよう。

この織機

長浜工場の内部

の本体は国産で、この織機の向って右に“Unifil”という英語が入った糸繰りの調整器がつい

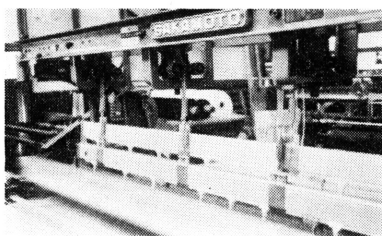


ていて(これは米国製とか…)糸繰りに異常があると、織機本体の左端にある特殊電球が点滅するので、それとすぐ判別できる仕掛けになっているなど、電源を切らない限り機械は移動を休止することがない。

従って作業員1人で10台まで操作・管理することができるそうだ。

クミアイ・カシミロン寒冷紗の織機

“こ こ に



596.6 という数字が出とるでしょう。これは、ここまですら596.6mになったことを知らせ

とるんですわ…”と大谷さんが指さした。

なるほど、織機の下部に596.6という数字が表示されている。もうあとホンの僅かで600mの既定の長さになる訳だ。

見ると、ごく僅かずつではあるが、ジリッ、ジリッとカシミロンの織布を巻き込むローラーが動いている。

“600mになりますと、織布をこの近くにある染色工場へ送りまして、そこで染色および樹脂加工を致しまして作業工程を終え、織布200m単位で一梱包と致します。日本の農業は、これからは量の時代から質の時代に入り、“クミアイ・カシミロン寒冷紗”のような資材を用いましての、ち密な栽培と経営が要求されますとか。私どもも、及ばずながら懸命に働きまして、ご要望におこたえせんと思うとります…”

大谷さんはこう決意を語った。

(15頁の写真は、左側は白地のもの。下に黒紙をあてがったので、右側と変らぬものが出来上がった。)